

保育者と子どものかかわりに感じられる 間主観的印象としての<しばり>と<あそび>

恒川直樹

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

1. 問題と目的

近年盛んな「保育者の専門性」や「保育の質」をめぐる研究は、保育者の言葉や行動、保育意識などのデータを統計的に処理し共通項を抽出することで、保育者の集団的な傾向を見定めていくものが多い¹⁾。金田(2000)は、これらが“保育者が自己の保育を対象化し自己評価をする際の手がかりになる評価方法”へもつながり得るとし、そのためには“保育者同士が心を開きつつ、「自分の」あるいは「自分たちの」保育を見直す際の共通の「鏡」になる客観的な尺度”が必要であるという²⁾。「保育所保育指針」の文言に集約されるようなそうした「客観的な尺度」は、確かに多くの保育実践を集合的に捉える枠組みとしては必要であろう。しかし個々具体の保育場面、たとえば何かのきっかけで気持ちを持ち崩した一人の子どもと、それを支えようとする一人の保育者のかかわりを考えてみると、そこで重要なのはそれぞれの言葉や行動の客観的な意味以上に、それぞれの思いや気持ち、その結びつきやすれちがいといった主観的、間主観的な意味である。そうした保育実践に即して「保育者の専門性」や「保育の質」といった問題を議論するためには、鯨岡(2001)の言う“個々の生き生きした事実がもつ説得性”を主観的、間主観的な水準で掬い取り、記述する試みが不可欠である³⁾。本試論はその試みの一端として、保育者と子どものかかわりに感じられる間主観的印象に焦点を当てて、それを記述する<しばり>と<あそび>という対概念を提示する。

2. 方法

滋賀県内法人立認可園H保育園における「関与しながらの観察」及び「エピソード記述」によった⁴⁾。週1日、特定のクラスの保育場面に準保育者的に継続的に参加させていただき、保育者や子どもたちと直接にかかわるなかで、印象に残った場面を適宜メモに取り、帰宅後できる限り速やかにエピソードとして記述した。本稿の事例は、年少クラス、12月中旬のものである。

3. 結果

エピソード「なんでそんなあっさり変わるの～」

午後のおやつの後、子どもたちがそれぞれに帰り支

度を整えているなか、Aちゃん(4歳2ヶ月女児)がたたんだスモックを持ってやってきて、私に見せる。私は普段よくあるように、Aちゃんが保育室に備え付けの私物入れに片付ける前に、スモックを綺麗にたためたことを見せに来てくれたのだらうと思って、「ちゃんとたためたなあ」と微笑みながら言葉をかけたが、Aちゃんはポツリと訴えるように「濡れた」と言う。私は「そうか……」と彼女のスモックをざっと触ってみるが、濡れているような感じはない。Aちゃんに「どこが濡れた？」と聞くと、「手のところ、冷たい」とつぶやくような答えが返ってくる。もう一度確かめると袖口がほんのわずかに湿っているが、すでにほとんど乾いてしまっている。私は少ししょげているようなAちゃんの雰囲気から、袖口を濡らしてしまったことで気持ちが落ち込んでいるのだらうと思って、ことさらに安心させるように「ホンマやな～。でも大丈夫や、これくらい。すぐ乾くよ」と、軽く言ってきた。

しかしAちゃんは「持って帰る～」と不満のこもった声で訴えるように言葉を返してきた。それまでの力なく私に寄りかかってくるような雰囲気からうって変わって、Aちゃんが強くこちらに向かってくるような感じである。私は、少し焦ってAちゃんの気持ちを収めようと「大丈夫やって。明日来たらもう乾いてるよ」とさらになだめようとするが、Aちゃんは「イヤ～、持って帰るの」と不満の声を強める。こうなるといったん言い出したら簡単にはあきらめない普段のAちゃんの手ごわさが思い起こされて、私は困ってしまう。少し引いて「うーん……、持って帰ってお洗濯してもらおうの？」と、それでもやや否定的なトーンで聞くと、Aちゃんは、やっと話が通じた、というような顔をして、「お洗濯してもらおうの」と強く肯いて繰り返す。私は「でもなあ……、別に汚れたわけじゃないし、お洗濯してもらわんでも大丈夫やで……」と、のりくらしとAちゃんを説得しようとした。そうするとAちゃんはますます不満が昂じてきたようで、「持って帰るのー」と少し大きくなった声には、今にも泣き出しそうな危うささえ漂ってくる。私はあきらめて、近くにいた担任のY先生に、Y先生ヘルプ!!と呼びかけた。

振り向いたY先生に「Aちゃんがスモック濡れたから持って帰りたいって……」と苦笑いしつつ伝えると、

Y先生はすぐに「そうか、じゃあ干しといてあげるわ」とAちゃんに向かって穏やかな口調でさりと言葉をかけ、Aちゃんの持っているスモックにずっと手を伸ばす。その声の調子にも手を伸ばす動作にも少しも強引なところは感じられず、かといってAちゃんにおもねてご機嫌を取るようでもない、ごく自然な感じである。これに対してAちゃんは「うん」と、こちらもあっさりとスモックを先生に渡す。さっきまで「持って帰って洗濯してもらおう」と訴えていたのが嘘のようで、その顔には不満な表情のかげどころか、晴れ晴れしたような感じにさえ見える。私はあっけにと取られて「なんでそんなあっさり変わるの～」と嘆息まじりに一人ごちた。Y先生は何事もなかったかのようにスモックを受け取ると、部屋の窓際に渡してある紐に干しに行ったが、Y先生とAちゃんのかかわりに感じられた独特の「しっくりした感じ」は私の印象に強く残った。

4. 考察

「スモックが濡れてしまった」と気持ちが落ち込んだAちゃんに接した私と担任保育者Y先生のかかわりの差異が際立つエピソードである。端的に言って、私とのかかわりには、「互いの思いが互いをギリギリとしぱりあっていくような苦しさ」があり、T先生とのかかわりには、「互いがしっくりとかみ合っていてなおかつ互いの間にゆったりとした隙間がある」ように感じられる。「関与しながらの観察」によって得られた間主観的な把握としてのこれらの感じを、くしぱり>及びくあそび>という探索的概念として使用して考察する。

私とAちゃんのあいだのくしぱり> 気持ちが落ち込んだAちゃんが私のところに来て自分の思いを訴え、私がそれを引き受けようとしたことは、Aちゃんと私の間に同種の経験を通じてある程度のく信頼ー自信>の関係ができていたからである。しかし、このときの私の対応はAちゃんの思いを受け止められず、この関係はゆらいだ。それを転機に私は『「Aちゃんの思いを受け止めてあげたい」という自分の思いをAちゃんに受け止めてもらおう』としてしまい、これは入れ子になった矛盾を孕む一種のダブル・バインドとなっている⁵⁾。最初は私とAちゃんを結びつける絆であったく信頼ー自信>だったが、そのゆらぎを私がやっきになって修復しようとすればするほど、私とAちゃんをしぱりあう枷として働いてしまう。私は自分の思いにくしぱられ>、そのことがAちゃんと自分とをくしぱる>結果になっている。こうしたかかわりに感じられる独特の膠着した雰囲気にくしぱり>と呼びたい。

Y先生とAちゃんのあいだのくあそび> Y先生の「そうか、じゃあ干しといてあげるわ」という言葉は、Aちゃんの「持って帰る」という訴えを論理上は受け入れていない。にもかかわらず、Aちゃんの気持ちは晴れ、Y先生の対応にずっと乗っていくことができたという事実は、二人のかかわりが主に言葉や行動の客観的な意味とは異なる水準で動いていたことを示している。それはその場に居合わせた私には、まずもって「互いがしっくりとかみ合っていてなおかつ互いの間にゆったりとした隙間がある」という全体的な雰囲気として間主観的に把握された。この独特の感じは、「ハンドルに適度のあそびがある」などというときの、「あそび」の語用法を連想させる感覚であり、そのアナロジーから私はくあそび>と呼ぶことにする。AちゃんとT先生のかかわりは、上述の私とのかかわりとは対照的に、間主観的な水準でく受け止めてもらおうー受け止める>というかたちでしっかりと結ばれており、そのとき言葉や行動の客観的な意味上の矛盾は、二人のあいだのくあそび>の隙間において回収されてしまう。個々の場面を投げ出さずに最後まで抱えきするという経験をT先生がAちゃんとのあいだで積み重ねてきたことから生まれたく信頼ー自信>の関係が、このようなくあそび>のあるかかわりを可能にしていると考えられる。

くしぱり>とくあそび>の意味と射程 くしぱり>もくあそび>も関与しながらの観察を行う観察者たる私の間主観的印象把握である。保育者の主観性により接近して捉えてみれば、それは「自分にゆとりがあるーない」といった感覚に通ずるものかもしれない。

現段階では荒削りで私的な概念だが、保育者や保育研究者が具体的な保育場面において身をもって感じる間主観的印象を掘り取るに足る概念として洗練されれば、「保育の質」や「保育者の専門性」を具体的な実践に即して考える際の、客観的ではない「共通の鏡」としての意味を持ちうるのではないだろうか。

文献

- (1) 金田利子・諏訪きぬ・土方弘子編著『「保育の質」の探究——「保育者ー子ども関係」を基軸として』ミネルヴァ書房 2000
- (2) 同上、「あとがき」pp.229-233
- (3) 鯨岡峻『保育を支える発達心理学——関係発達保育論入門』ミネルヴァ書房 2001
- (4) 鯨岡峻『関係発達論の構築』ミネルヴァ書房 1999
- (5) G・ベイトソン『精神の生態学』新思索社 2000